

大学生の Egogram に関する考察

—本学受講生を対象に—

松 波 慎 介

A study on the Egogram of students at classes
in Kogakuin University

Shinsuke Matsunami

1. は じ め に

Eric Berne によって創案された Transactional Analysis—TA—が交流分析という名称で日本の医学界に導入されたのは1971年のことである。以来 TA は医学の治療分野という限られた世界に留まることなく教育界、企業界、さらには一般家庭にまで人間関係理解あるいは人間形成促進の手がかりとして活用されるようになってきている。

TA は、一般人にとって難解であり、またそれゆえにコントロールすることの難しい自他の精神力動に容易にアプローチする可能性を開くものとして創案された。この TA は、構造分析、交流パターン分析、ゲーム分析、脚本分析という四つの分析によって構成される理論体系であるが、これらの分析の基本となるのが自我状態—Ego State—という概念である。

Berne は、この自我状態を『現象的には様々な心理的反応様式の一貫した一つのシステムであり、機能的には1組の一貫した行動パターンである。より实际的に言えば、一つの心理的反応様式のシステムで、それに関連した一組の行動パターンを伴うものである。』¹⁾と定義し、個人の人格には外的にも内的にも観察の可能な三つの自我状態が存在すると仮定した。

第1は、Parent—親—の自我状態であり、両親や養育者など外部から吸収した態度や行動から成り立ち、外へ向けては他人に対する統制的干渉的態度や保護的援助的態度として現れ、自分自身に向けては自己内部の Child な感情に影響を与え続ける親のメッセージとして感じられるところの心の様態である。

第2は、Adult—大人—の自我状態で、その人の年齢には関係なく客観的に現実を見つめ、情報を収集し、感情に左右されずに知的かつ合理的に状況判断し可能性を図ろうとするときの心の様態である。

第3は、Child—子供—の自我状態で、早幼児期に感じた全ての衝動や、その時期の経験に対する必要から反応したことの残像から成り立ち、子供のように感じたり、欲したりするときの心の様態である。

また Parent には人を批判したり、叱りつけるような批判的統制的に価値づけようと反応する部分の Critical Parent—CP—と人をいたわったり励ましたりする保護的援助的に思いやる部分、Nurturing Parent—NP—という機能的に相対する二つの自我状態があり、Child にも自然の感情のままに自由にありのままに振る舞おうとする部分の Free Child—FC—と、人に合わせようとして自然の感情を抑えて順応しようとする部分、Adapted Child—AC—という二つの機能的に異なる自我状態があると考えた。

Berneは、これらの互いに区別できる自我状態は、その人の思考、感情及び行動と密接に結びついており、その内の一つがその人の人格全体を統制しているように見えたり、さらには一人の人間がこれらの状態の間をすみやかに移動することができる事実にも気付いた。

TA では、対人交流の中でこれらの機能を異にする自我状態のどれを、どの状況で、どの程度表出するかは個個人により違い、それがその人のパーソナリティや生き方を象徴すると考える。このような個個人の対人交流の中の行動の違いをその元となる自我状態の表出頻度の違いによって説明し、分析するために、五つの自我状態の表出頻度をグラフに示したものを Ego Gram と言う。

Dusey によって1972年に創案された Ego Gram は、全ての観察可能な行動一言語・音声・ジェスチャー・姿勢・いわゆる行動などを五つの機能的な自我状態に照らし合わせて分類し、それらの表出頻度を棒グラフに図式化した。これはTAに精通する者が観察したものを直観的に判断して作成したもので、客観的な基準が不明瞭であり、その信頼性、妥当性の検証は十分とは言えない。その後、Dusey の Ego Gram を基に心理テストとしての一般的な作成方法に従って、日本の杉田・岩井らによって質問紙法 Ego Gram が幾つか開発され、数量的解析が可能となってきた。その一つに、杉田らによって1977年に開発された九大式 Ego Gram Check List (青少年用)がある²⁾。

筆者は、自己発見、自己形成の時期であり、また対人関係や状況の変化に不安を感

じやすく、葛藤や混乱を生じたり、過度に防衛的になりやすい青年期の学生に、自己分析による自己理解と、心の健康の自己管理を促すため、筆者の講義を受講する本学の学生を対象に、この質問紙法 Ego Gram を実施してきた。

Ego Gram は、本来個人を臨床的に診断したり、自己への気づきを促進し、自己理解に基づく自己変容を図ったり、エンカウンターな関わり合いの中で、相互理解を促進したり、対人関係の改善を図ったりするためのツールとして用いられるものである。しかし、他の心理テスト同様統計的な処理を施すことによって対象群のパーソナリティ特性や、後述する Life Position の全体傾向などが把握でき、相補的な教育的対応のデータになるものと考えた。そこで筆者は、受講生の Ego Gram で得た各自我状態の得点を集計処理し、その結果に基づいて Ego Gram からみた受講生のパーソナリティ特性や Life Position について言及してみたい。

註

- 1) E. Berne (杉田訳)「交流分析と心身症」p. 10 医歯薬出版 1973
- 2) 松波慎介「エゴグラムによる競技行動の分析」工学院大学研究論叢20号 p.200~202 1983

2. 対象及び方法

1983年度から1988年度の6年間にわたる各年度に筆者の保健体育理論を受講した工学院大学の正規受講生(1年)808名と再履修受講生125名を対象として九大式 Ego Gram Check List 調査を実施した。

その内訳は1983年度一機械1年40名、化工1年32名、建築1年48名、再履修生22名一、1984年度一機械1年42名、化工1年29名、建築1年54名、再履修生17名一、1985年度一機械1年108名、工化1年49名、化工1年38名、再履修生23名一、1986年度一機械1年91名、工化1年45名、化工1年23名、再履修生40名一、1987年度一機械1年29名、化工1年26名、建築1年90名、再履修生12名一、1988年度一機械1年40名、化工1年30名、再履修生11名となっている。

調査は各年度によって異なるが、前期受講生の場合は5月下旬から6月上旬、後期受講生は10月下旬から11月上旬に実施した。

この調査によって得られた受講生の Ego Gram の各自我状態、CP、NP、A、FC、AC の得点をコンピューター入力し、これを基に PAC の平均得点、PAC 各主導型の比率、Ego Gram の平均プロフィール、CP : NP 及び FC : AC の優位度比率、Peak Ego Gram, Bottom Ego Gram, Life Position を求め、これらを学科別、年度別、正規受講生と再履修受講生に分けて検討した。

3. 結果と考察

(1) PAC の平均得点

先に述べたように、TA では人格の働きを基本的には Parent—P—, Adult—A—, Child—C—の三つの自我状態に分類するが、この PAC を用いて個人の行動や態度を分析する方法を構造分析という。

Ego Gram で得た CP と NP の得点を加えてP得点とし、FC と AC の得点を加えてC得点とし、A得点を2倍してA得点として学科別、年度別、正規受講生と再履修生に分けて PAC の平均得点の比率を出し、そこから受講生の自我構造的な特徴を概観してみたい。

a) 学科別にみた PAC 比率

PAC の平均得点を学科別（再履修生を除く）に棒グラフで示したのが図1である。機械（A1）、化工（B2）、建築（D1）の受講生の場合、P、Cに対しAがやや優位な構造を示す。これに対し化工（B1）の受講生においては、他科に比べP、A得点にはあまり差はないが、C得点だけが平均2.5（約6%）も上回っており、その結果Cがやや優位な構造となっている。

〔考察〕

機械、化工、建築の受講生は、総体的にみると、Aの自我状態がPやCをほどよくコントロールし、合理的、客観的な態度で現実を踏まえ、計画性を持った行動選択ができるようであるが、化工の受講生の場合はCの自我状態に主導権があるため、感情的な面から自分の行動や態度が選択される傾向が出やすいものと思われる。

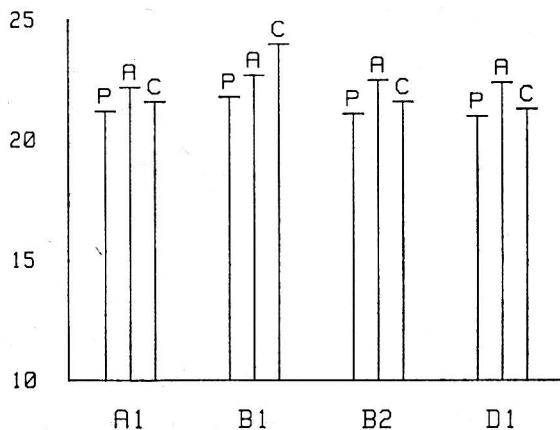


図1 学科別にみた PAC 平均得点

大学生の Egogram に関する考察

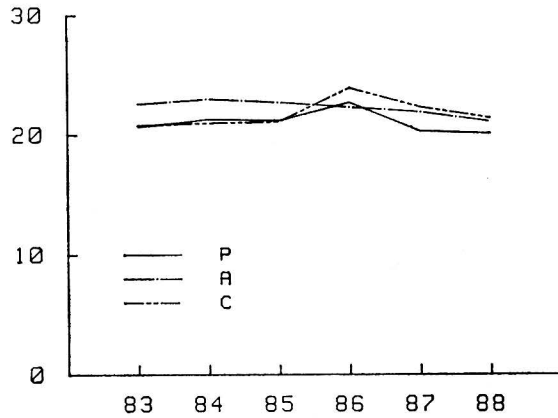


図2 PAC 平均得点の年度推移

b) 年度別にみた PAC の比率

PAC 平均得点を年度別（再履修生を除く）に集計し、これを年度推移を示すグラフにしたのが図2である。83年度から85年度までは、A優位の構造を示している。86年度は、CとPが急騰した結果Aが最低位を示すC優位の構造に大きく変化している。87年度以降になるとPが再び大きく後退し、CとAに差がなくPだけがやや低いP劣位の様相を示すようになっている。

〔考察〕

83年度～85年度までの受講生は、Aの自我状態から論理的に思考し、合理的、客観的に状況を判断し、現実的な行動のとれる大人っぽい面が総体的にやや目立つと思われる。

86年度を受講生の場合は、自分の感情や欲求に左右されて感情を出したり、引っ込みたり頼ったりといった子供っぽいCの自我状態からの行動がやや出やすいと思われる。

87年度以降では、85年度以前と比べるとCからの行動的特徴がやや目立つと同時に主観的な干渉を加えるようなPからの行動的特徴が一層弱くなってきているように思われる。

c) 再履修受講生の PAC 比率

再履修受講生は、各年度及び各学科にバラツキが多いため、年度別あるいは学科別の検討は除外し、Total として正規受講生との対比を試みた。以下再履修受講生についての検討はこれに準ずる。

表1は、再履修受講生の PAC 平均得点と正規受講生のそれとを比較したものである。

表1 PAC の平均得点

	n	P	A	C
正 規 受 講 生	808	21.2	22.4	21.8
再 履 修 受 講 生	125	20.1	20.9	22.2

正規受講生に比べP, Aの両得点とも約3%ほど小さくなり, Cが1%程度大きく
なっている。その結果, 正規受講生のA優位の構造に対し, 再履修受講生はC優位の
構造になっている。

〔考察〕

再履修受講生のPAC構造は, 正規受講生に比べて感情や欲求に根差したCの自我
状態に主導権を握られ, このCに対し理想的倫理的な立場から律したり励ますなど,
自他に干渉を加えるようなPの自我状態や, 自分の立場を現実的合理的に判断し, 知
性的にCの感情や欲求をコントロールするAの自我状態がやや不足しているように思
われる。

(2) PAC 各主導型の比率

前述したPACの各得点をもとに受講生一人ひとりについてP主導型, A主導型,
C主導型の三つのタイプに分類し, その比率を学科別, 年度別, 正規受講生と再履修
生に分けて検討した。

P主導型とはAとCの得点を加え, それを2等分したものに6を加えたものより大
きいタイプとした。つまり $P > (A + C) \times 1/2 + 6$ となるものをいう。同じくA主導
型とは $A > (P + C) \times 1/2 + 6$ となるもの, C主導型とは $C > (P + A) \times 1/2 + 6$ とな
るものとした。

a) 学科別にみた各主導型の比率

学科ごとに各主導型の受講生比率を棒グラフに表すと図3のようになる。(再履修
生を除く)

機械(A1), 化工(B2), 建築(D1)の3学科においては, A主導型の受講生
が22~25%と多く, 次いでC主導型が14~17%と続き, P主導型は9%台と少なくな
っている。一方の工化(B1)の受講生では, A主導型とP主導型の割合は他科とあ
まり違わないが, C主導型の割合が目立って多く, 32%にも達している。

〔考察〕

この結果は, PACの平均得点から見た学科別の傾向と一致しており, 前述した機
械・化工・建築の3学科と工化の受講生の総体的な特色の違いを一層顕著に示したと
言えよう。

大学生の Egogram に関する考察

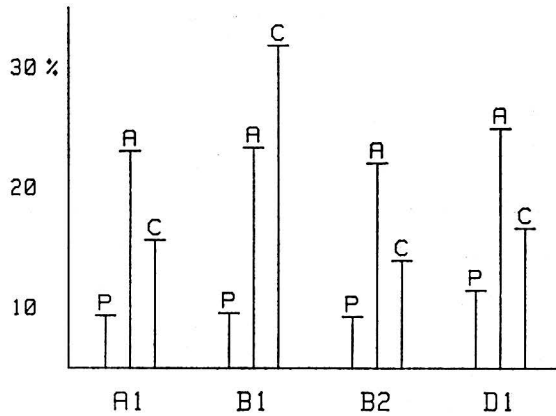


図3 学科別にみた各主導型の比率

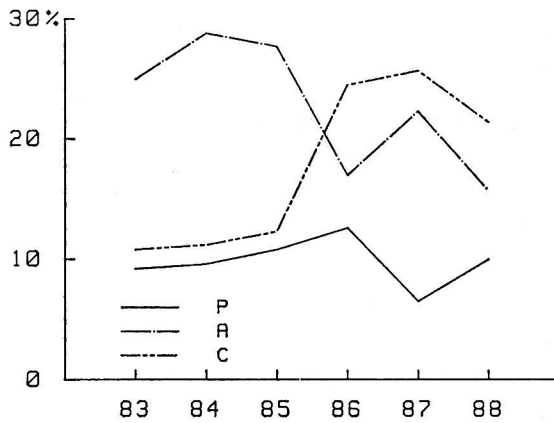


図4 PAC 主導型比率の年度推移

b) 年度別にみた各主導型比率の推移

PAC 各主導型受講生の割合を年度別に集計し、その推移を示したのが図4である。
(再履修生を除く)

P主導型の割合は86年度から87年度において落ち込みが見られるものの、全体として年度の変動は目につかない。これに対し、A主導型とC主導型の比率は85年度と86年度を境にしてはっきり入れ替わっており、85年度以前においてA主導型の割合が圧倒的に高かったのに対し、86年度以降ではC主導型が優位となってきている。

〔考察〕

この結果は、PAC の平均得点比率においても見られた傾向であるが、年度の推移とともに合理的、客観的判断から現実を吟味できる知性的でクールなタイプの受講生

表 2 PAC の主導型比率

	n	P	A	C
正 規 受 講 生	808	9.9%	23.4%	17.5%
再 履 修 受 講 生	125	12.8%	16.6%	25.6%

が減少し、感じるままに求めたり、頼ったりする子供っぽく感性的なタイプの受講生が増加してきている傾向を伺わせる。

c) 再履修受講生の各主導型比率

PAC 各主導型の比率を、正規受講生のものと比較検討したのが表 2 である。正規受講生の比率は、A 主導型比率が 23.4% と最も多く、次いで C 主導型の 17.5% と続き、P 主導型は 9.9% と他より著しく下回っている。これに対し再履修受講生では、A 主導型と C 主導型の比率が大きく逆転し、C 主導型が 25.6% と A 主導型を約 10% も上回る結果となっている。

〔考察〕

正規受講生を総体的にみると、A に主導権を握らせた合理的状況判断のできるクールで現実的なタイプが多いのに比べて、再履修受講生にはその時々気分や自己内部からの欲求に左右されやすく、そのために計画的に秩序正しく行動をコントロールするのが苦手なタイプが相当多数いるように思われる。

(3) Ego Gram の平均得点とプロフィール

受講生一人一人の Ego Gram から五つの機能的な自我状態、CP, NP, A, FC, AC の各平均得点と、その Ego Gram プロフィールを求め、学科別、年度別、正規受講生対再履修受講生に分けて検討した。

a) 学科別にみた平均 Ego Gram

学科別に各自我状態の平均得点を比較検討してみると CP, NP, A, FC においては、学科による目立った違いは認められないが、AC において工化受講生の平均得点が高学部に比べて 2 点 (10%) 以上も高い得点となっている。その結果、機械、化工、建築の 3 学科の平均 Ego Gram は図 5 に見るように CP と AC の両袖が垂れ、NP と FC が少し山になり、A が僅かに谷となるプロフィールを描いているが、工化の平均 Ego Gram においては、AC が FC よりやや高くなった異質なプロフィールを描いている。

〔考察〕

4 学科の平均 Ego Gram から総体的に概観すると、どの学科も自他を厳しく律したり、責任感や使命感を持って目標指向的に行動したり、理想を求める CP の自我状

大学生の Egogram に関する考察

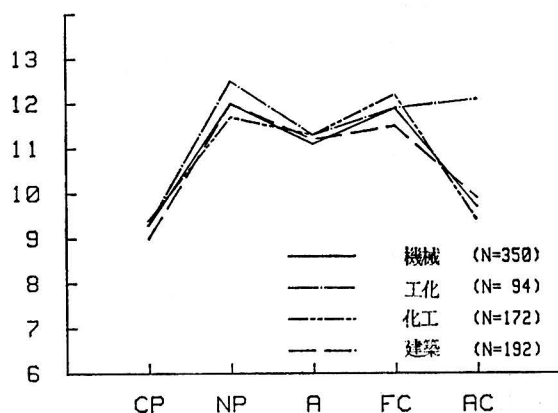


図5 学科別にみた受講生の平均 Ego Gram

態がやや低く、対照的に優しく寛大で対人的に温和でソフトなNPの自我状態がやや高くなっているため人を押し退けてまでやり遂げようという強さがなく、目標意識も弱いように思われる。

機械、化工、建築の3学科においては、FCの自我状態に比べてやや高めになっているため、総体的には活発で積極的で自発的なのびやかな面が前面に出やすく、相手に合わせて妥協したり、指示に素直に従うといった従順なChild—AC—がやや低い、勝手気ままな面、辛抱強さに欠ける面があるかと思われる。

工化の平均 Ego Gram は、Child の面で他の3学科と違い、FCの自我状態も平均以上であるが、それ以上にACの自我状態が他科に比べ10%以上も高くなっているため自己主張が少なく、消極的な面、依存的な面がやや目立つかと思われる。

b) 年度別にみた平均 Ego Gram

表3をもとに年度別の各自我状態の平均得点を比較検討してみると、86年度受講生のNP(12.9)とAC(11.7)の得点が他の年度に比べ5~10%高くなっている。また、87年度、88年度という近年度の受講生においてCPとAの低下傾向が伺え、反対にFC得点がやや上向きになっている。このことは、同じ学科群を対象とした83・84年度群と87・88年度群の平均 Ego Gram プロフィール(図6)の違いに、より明確にみることができる。

〔考察〕

86年度受講生においては、NPの援助的、教育的な自我状態と、ACの順応的、依存的な自我状態がやや強く表れているが、これは学科別にみた工化の平均プロフィールとよく似ている。そこで学科別及び年度別をクロスして検討してみると、86年度の

表3 年度別受講生の Ego Gram 平均得点

	n	CP	NP	A	FC	AC
1983年度	120	9.2	11.5	11.3	11.9	9.0
1984年度	125	9.5	11.8	11.5	11.1	9.9
1985年度	195	9.2	12.0	11.3	11.8	9.3
1986年度	159	9.8	12.9	11.2	12.2	11.7
1987年度	139	8.6	11.7	11.0	12.1	10.2
1988年度	70	8.6	11.5	10.6	12.1	9.4
TOTAL	808	9.2	12.0	11.2	11.9	10.0

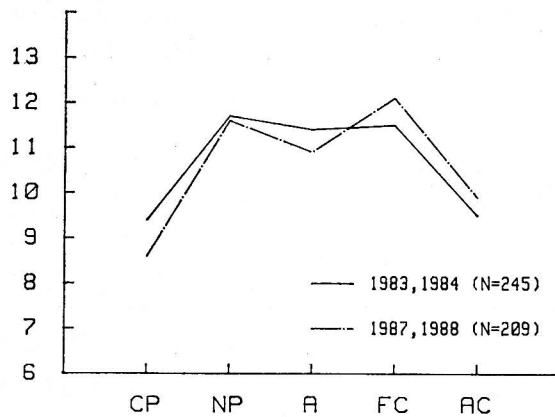


図6 1983・1984年度群と1987・1988年度群の平均 Ego Gram

工化受講生の NP 得点13.2と AC 得点13.7は他科に比べ著しく高くなっていることがわかった。つまり86年度受講生の特異な結果は、工化受講生のそれによってもたらされたものと推察される。

同じ学科群を対象とした84年度以前と87年度以降の受講生の平均プロフィールを比較してみると、近年の受講生においては、総体的に自他の統制力批判力、目標意識、責任感、使命感といった CP の特徴的側面と論理的客観的思考、現実的合理的判断、秩序ある計画的行動など A の自我状態の特徴的側面がやや減少し、FC の天真爛漫で物事にとらわれない、気ままで気軽な側面や意欲的創造的で感情表現豊かな側面がやや増加してきているように思われる。

c) 再履修受講生の平均 Ego Gram

図7に示すように、正規受講生と再履修受講生の平均 Ego Gram において CP と AC にはっきりした差異が認められる。再履修受講生において CP で6.5%、Aで3.5%正規受講生の平均を下回っており、特に CP の低得点が目立つ。

大学生の Egogram に関する考察

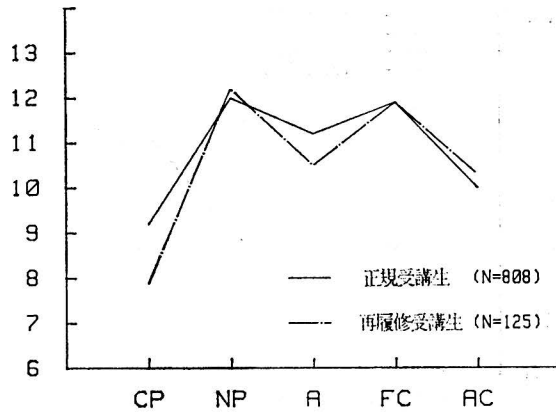


図7 正規受講生と再履修受講生の平均 Ego Gram

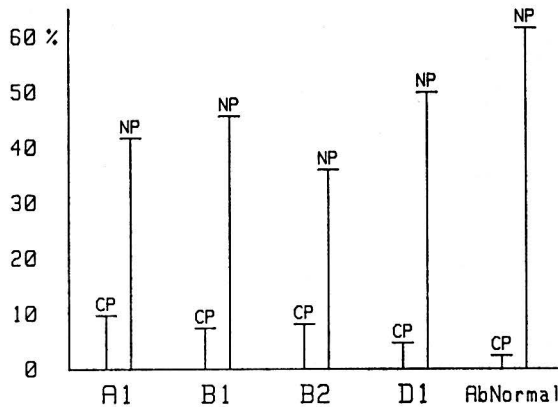


図8 CP 優位と NP 優位の対比

〔考察〕 前述した PAC 平均得点の結果では、再履修受講生において特に P が構造的に劣位であったが、これを機能的にみると CP の自我状態の低さによることがわかる。つまり再履修受講生においては、特に道徳的に倫理的に自他を価値づけたり、規制したりする厳格さや、自他をあるレベルへと引き上げようとする理想や目標意識が不足しているように見受けられる。また、自分の一時的な感情や欲求をコントロールして現実的合理的に状況を判断し、計画的に物事を遂行していく Adult な側面にも、人のいい NP の側面やわがままな FC の側面との間にギャップがあるように思われる。

(4) CP 対 NP 及び FC 対 AC の優位度比率

P の自我状態の中の CP と NP 及び C の自我状態の中の FC と AC はそれぞれ

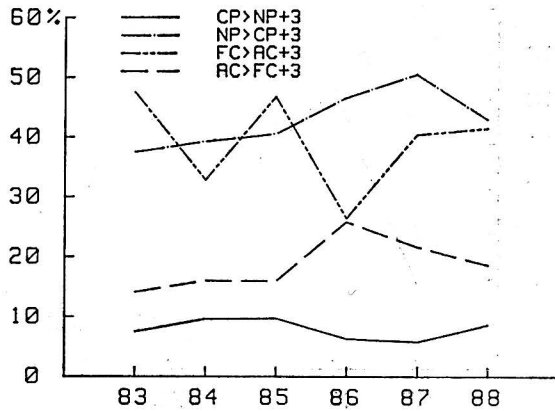


図9 CP, NP, FC, AC 各優位比率の年度推移

機能的に対照的な特徴を有しており、その双方のどちらの機能が高いかによって、パーソナリティに明確な違いを表すものと考えられる。そこで対照的な CP と NP, FC と AC において Ego Gram 得点で 4 以上の差を示すものを優位と考え、その比率を調べた。

a) CP 優位と NP 優位の対比

図 8 は、CP 優位な受講生の割合と NP 優位な受講生の割合を棒グラフで対比させ、学科別及び再履修受講生 (AbNormal) に分けて表したものである。

これをみると機械 (A1) で 4:1, 化工 (B1) で 6:1, 化工 (B2) で 4:1, 建築 (D1) で 10:1 と、どの学科も NP 優位な受講生が CP 優位な受講生を比率において圧倒的に上回っている。学科別には、特に顕著な違いは目立たないが、建築 (D1) において NP 優位傾向がやや強い。

再履修受講生 (AbNormal) は、正規受講生に比べてさらに NP 優位の傾向が著しく、正規受講生において NP, CP 優位比率の平均が約 5:1 であるのに対し、再履修受講生のそれは 25:1 にも達している。

また図 9 で優位比率の年度推移をみると、NP 優位の傾向は年度の推移とともにやや強まっているように見受けられる。

〔考察〕

受講生全体に P においては、批判的で規制的な厳しい CP の自我状態が優位な受講生は極めて少なく、許容的で養育的、奉仕的で優しい NP の優位な受講生が圧倒的に多い。つまり自他を律することに甘く、目標意識が弱く、けじめがなく現状に流されやすい傾向が伺える。学科別にみると、建築学科にその傾向がやや強い。また、再履

大学生の Egogram に関する考察

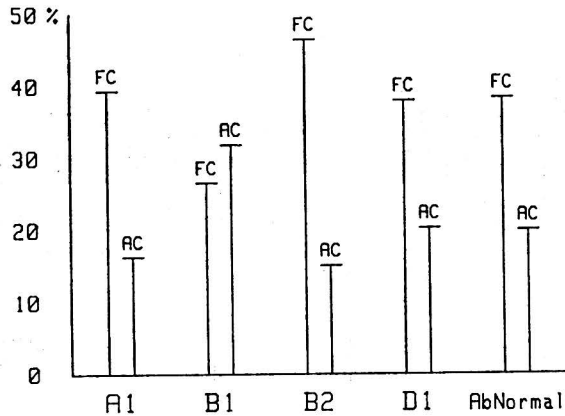


図10 FC 優位と AC 優位の対比

修受講生になると一段とこの傾向が強まっている。年度推移でみると86年度以降において、この傾向が一層強まってきているように見受けられる。

b) FC 優位と AC 優位の対比

図10によると、機械 (A 1)、化工 (B 2)、建築 (D 1) の3学科の受講生においては、2倍近いあるいはそれ以上の差で FC 優位の比率が高いのに対し、化工 (B 1) の受講生だけは逆に5%ほど AC 優位の比率が高くなっている。また、化工 (B 2) の受講生において FC 優位の者と AC 優位の者の比率差が他科に比べやや大きい。

再履修受講生 (AbNormal) に特別な傾向は見られない。また、年度推移 (図 9) を見ると86年度受講生において FC 優位の者と AC 優位の者の比率がほぼ同率と接近している。

〔考察〕

機械、化工、建築の3学科の受講生においては、思いどおりに感情表現ができ、自己主張もできる自由で伸び伸びしたタイプが多く、特に化工の受講生にその傾向が顕著であると思われる。

化工の受講生の場合、どちらかと言うと、自分を抑えて人に合わせたり、消極的、依存的で自己主張の少ないタイプが多いようである。こういうタイプの者は臨床的には神経質傾向が強かったり、対人的接触からのストレス感情を抑圧するような傾向が見られるといわれている。例えば、神経症あるいは心身症傾向を測定するための CMI テストにおいて、その傾向が強まるほどに FC に対する AC の比率が高くなることが知られている¹⁾。

86年度受講生において、FC 優位の者と AC 優位の者が接近しているが、これは(3)

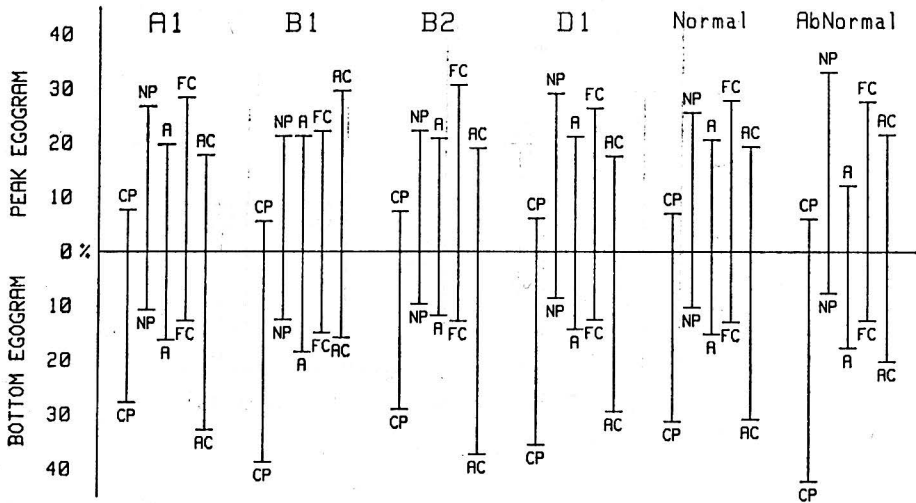


図11 学科別及び正規受講生と再履修受講生の PEG, BEG

のb)で述べたのと同様に86年度の工化受講生のAC優位比率の高いことによるものと考えられる。

(5) Peak 及び Bottom の Ego Gram

あるグループの特徴を Ego Gram をもとにしてとらえるために Ego Gram の中で最も高い得点を示す自我状態—Peak Ego State—に着目し、どの自我状態を Peak とする者がどの程度の比率で分布するかをグラフで示すとき、これを Peak Ego Gram—PEG—という。同様に Ego Gram の中で最も低い得点を示す自我状態—Bottom Ego State—に着目してその比率をグラフ化したものを Bottom Ego Gram—BEG—という²⁾。

a) 学科別にみた PEG 及び BEG

図11は、学科毎に受講生の PEG と BEG とを棒グラフで表し、その両者を上下に重ね合わせて示したものである。

これによると機械(A1)受講生と化工(B2)受講生の Ego Gram が類似しており、両者とも最も高い FC と NP を山とし、最も低い CP と A, AC を谷とす右上がりのM型の PEG を示し、BEG においては、トップの AC と次の CP が両サイドに突出した逆U型を示している。化工(B2)受講生において特に FC を Peak とする者が多い。

建築(D1)の受講生は、前二者と比較すると PEG において FC にかわり NP が最多で、BEG では、AC にかわり CP が最多となっているという相違はあるが、NP,

大学生の Egogram に関する考察

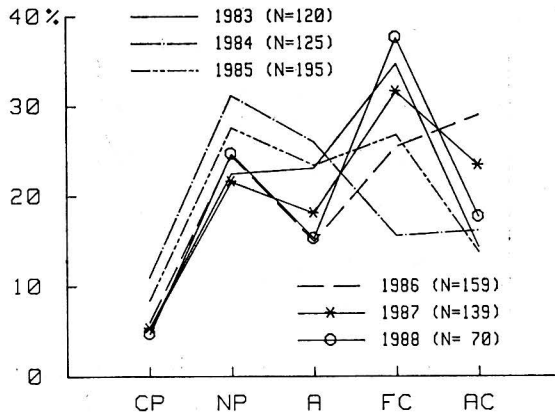


図12 年度別にみた Peak Ego Gram

A, FC が Peak に, CP, AC が Bottom に偏っている点では変わりがない。

工化 (B1) の受講生の場合は, AC において他の学科との間に大きな相違点が認められる。それは他科の AC がおよそ 1:2 と Bottom に偏っているのに対し, 工化 (B1) においては, 全く逆に 2:1 の比率で Peak に偏っていることである。その結果, 工化 (B1) 受講生の PEG では CP が最低で AC が最高の右上がり型, BEG では CP だけが極端に飛び出した逆 L 型となっている。

〔考察〕

機械及び化工の 2 学科の場合, FC の自我状態が主導権を握りやすく, 意欲的で自発性に富み, 伸び伸びとした雰囲気強いが, 自分勝手に気ままに振る舞うわがままな側面も目立つものと推察される。また, AC の自我状態が出にくいいため, 自己の願望や欲求を押さえて周囲に合わせるとか, 素直に指示に従うといった従順さはあまり期待できないようである。しかし, 一方で自分も相手を批判したり押しつけたり, 決めつけるようなことは少なく, むしろ NP から寛大に相手の行為を容認するタイプが多いようである。化工の受講生には特に自己中心的で気ままなタイプが多く, 自己主張も強いように思われる。

建築の場合は, 相手に対して寛大で許容的な NP の面が特に強く, 自ら援助の手を差しのべるなど世話好きな側面が目立つ半面, CP の自我状態が特に出にくいタイプが多いため規律的, 統制的に自他をコントロールできず, ルーズで曖昧な面が表出しやすいものと思われる。

工化の受講生においては, CP の自我状態が Bottom となっているタイプが特に多いため, けじめのなさ, 曖昧さ, 自己規制の弱さなどが特に目立ち, 一方 PEG にお

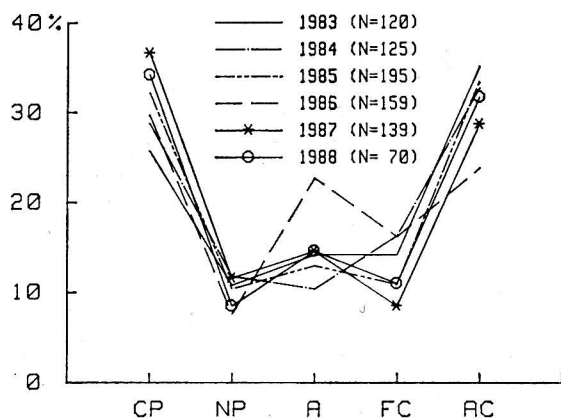


図13 年度別にみた Bottom Ego Gram

いて AC が最も高くなっているので他人に気をつかい、自分の感情や欲求を抑え、自己主張せず、依存的で迎合的なタイプがやや多いものと見受けられる。

b) 年度別にみた PEG 及び BEG の推移

PEG の年度推移を図12によってみると、CP が最低位にあることは、毎年度変化ないが、CP 以外は83年度—FC, A, NP, AC—, 84年度—NP, A, AC, FC—, 85年度—NP, FC, A, AC—, 86年度—AC, FC, NP, A—, 87年度—FC, AC, NP, A—, 88年度—FC, NP, AC, A—と毎年度、その順位が入れ替わっている。

図13の BEG では、85年度以前では AC が Bottom の最高比率であったのが、86年度以降 CP が最高比率を示すようになってきているが、その変動差は少ない。

86年度において、A の Bottom 比率が一時的に高くなっているのが目立つ。

〔考察〕

PEG では、CP の自我状態から権威的、強圧的態度に出たり、独善的に振る舞うようなタイプは一貫して少ないことがわかるが、他の自我状態の主導権は、年度によって様々に入れ替わっており、年度毎に受講生の全体的な雰囲気に変化していることを推察させる。

BEG からは、86年度受講生に A 欠如による状況判断の甘く、ずさんで場当たりの、首尾一貫した行動の苦手なタイプが相当数いることが推察される。

c) 再履修受講生の PEG 及び BEG

図11 に示した正規受講生 (Normal) 全体の PEG をみると、FC (27.7%), NP (25.5%) を二つの山とし、CP (7.0%) が極端に低い右上がりのM型となっている。

これに対し再履修受講生 (AbNormal) の PEG は、同じ右上がりのM型を描くが、

山において NP の比率が高く (32.9%), 谷において A の比率が目立って低く, 正規受講生の 20.5% に対して 12.1% となっている。

BEG を比較すると, 正規受講生の場合 CP と AC の Bottom 比率が 31.1% と 30.7% とほぼ同率で高くなっているのに対し, 再履修受講生においては, この両者のバランスが崩れ, CP の Bottom 比率が 42.1% となっている。

〔考察〕

再履修受講生の場合, P において NP の自我状態が Peak, CP の自我状態が Bottom となっている受講生が圧倒的に多いため, 自分を犠牲にしてまで他人の面倒をみたり, 情に流されて良し悪しのけじめがなくなりやすく, 自他を律することに甘く, 規律ある生活態度に欠け, 理想や目標が曖昧なタイプが多いようである。

論理的に考え, 客観的に評価し, 現実的合理的判断から行動しようとする A を Peak とするタイプが正規受講生に比べかなり少ない。

(6) CP 対 NP, FC 対 AC の対比からみた Life Position

TA では, 幼児期における親及び周囲との交流から培われた自他に対する定着した価値観念と, それに基づいた人生に処する対人態度を基本的な生きる構え—Basic Life Position—という。この基本的な構えには次のような四つの Position がある。

- ① 自己肯定……〔++〕, ② 自己否定他者肯定……〔-+〕, ③ 自己肯定他者否定……〔+-〕, ④ 自己否定……〔--〕。

これら四つの Position と機能的な五つの自我状態の関係についての杉田らの因子分析法による研究によれば, 大学生において FC は自己受容因子に正の負荷が高く, AC は自己受容因子に負の負荷が高い。また, NP は他者受容因子に正の負荷が高く, CP は自己受容因子に正の負荷が他者受容因子に負の負荷が認められ, A はどちらの因子に対しても無関係であったと報告している³⁾。さらに杉田らは, 大学生を基本的な構えから 4 群に分け偏差値によって Ego Gram を描いた場合, 〔++〕は NP と FC が高く, CP と AC が低い M 型, 〔-

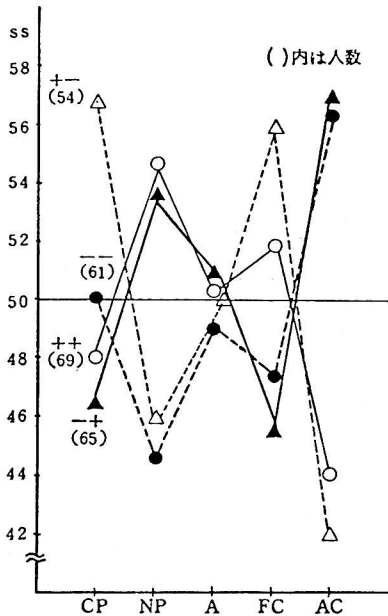


図14 基本的構えによる Ego Gram の違い
(大学生の場合)—杉田ら1980—

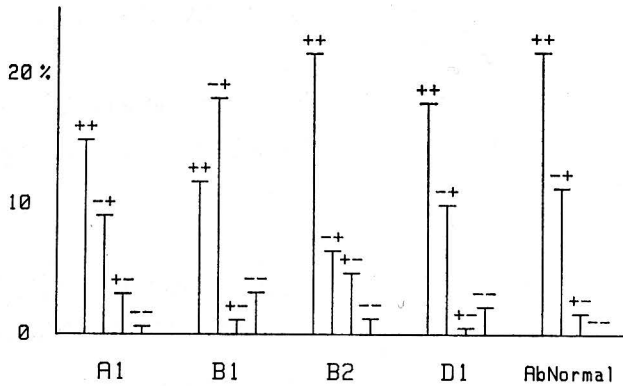


図15 学科別にみた Life Position の比率

+] は NP と AC が高く、CP と FC の低いN型、[+-] は CP と FC が高く、NP と AC が低い逆N型、[--] は CP と AC が高く、NP と FP の低いW型となることを示した⁴⁾。(図14)

ここでは受講生の描いた Ego Gram から NP が CP より4以上大きく、FC が AC より4以上大きい、つまり $NP > CP + 3$ 、 $FC > AC + 3$ のタイプを [++], $NP > CP + 3$ 、 $AC > FC + 3$ のタイプを [-+], $CP > NP + 3$ 、 $FC > AC + 3$ のタイプを [+ -], $CP > NP + 3$ 、 $AC > FC + 3$ のタイプを [--] とし、これら四つの Position の割合を学科別、年度別及び正規受講生と再履修受講生に分けて検討した。

a) 学科別及び再履修生の Life Position

四つの各 Position に位置する受講生の割合を学科別に棒グラフに示すと図15のようになる。

機械 (A1)、化工 (B2)、建築 (D1) の3学科では、[++] に属する受講生の割合が最も高く、他の3 Position の合計との比率でも2:1と高い。次いで多いのは、[-+] となっている。

これに対し工化 (B1) 受講生の Life Position は [++] と [-+] の比率がほぼ逆転している。工化 (B1) と建築 (D1) の2学科において [+ -] [--] の比率が他の学科と逆になっているが、その差は2~3%と少なく、特殊な傾向とみなすことはできない。

また、再履修受講生 (AbNormal) の Life Position は正規受講生の機械、化工、建築の3学科の結果と特に相違は認められない。

[考察]

機械、化工、建築の3学科のより多くの受講生は自他の独自の価値を相互に認め、

大学生の Egogram に関する考察

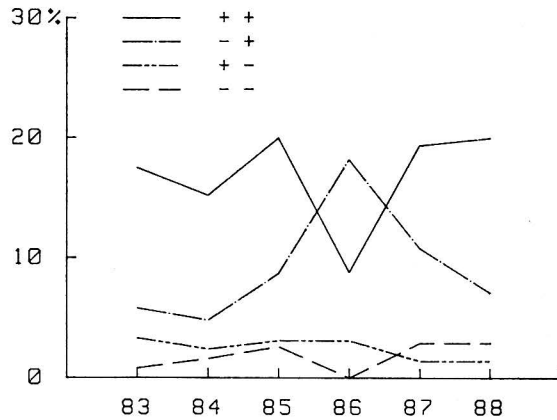


図16 Life Position の年度推移

周囲の人と調和を保ちながら自己を大切に、自信と信頼を基礎とした建設的な Life Position に身を置いていると言える。

また、自己に自信が持てず憂鬱な気分での消極的、逃避的、自己否定的な Life Position から対人行動をとる者も10%足らずいるようである。こうした傾向は、再履修受講生の場合も同様である。しかし、工化の受講生の場合は、自他肯定の建設的な生き方よりも自己否定他者肯定の自己卑下や劣等感から対人的に不安、不満、恐れなどの感情を内に秘めつつ、他をあてにしながらやや屈折した対人態度をとるタイプの受講生がかなり多いと言えよう。

b) 年度別にみた Life Position の推移

正規受講生の四つの各 Life Position に占める割合を年度別にその推移をみようとしたのが図16である。

これによると86年度を除く各年度において〔++〕の者の比率が他の Position を大幅に上回っているのに対し、86年度受講生だけは〔++〕と〔-+〕の両 Position の比率が逆転している。また、〔+-〕と〔--〕の両 Position の比率が、87年度から逆転しているが、どちらも全体に占める割合が極めて低率であり、その差は僅かである。

〔考察〕

86年度の受講生の場合、(3)の b) で述べたのと同様、工化受講生の傾向がそのまま86年度の特徴となって反映し、自己否定他者肯定の Position から自信のない消極的な対人姿勢を表す受講生が多くなっているものと思われる。しかし、この年度においては、機械受講生にも同様の傾向が見られ、自他肯定タイプより自己否定他者肯定の

表 4 1986年度受講生の Life Position 比率

	機 械	工 化	化 工	TOTAL
＋ ＋	8.8%	6.1%	9.6%	8.8%
－ ＋	18.7%	24.4%	4.3%	18.2%
＋ ー	2.7%	2.4%	4.3%	3.1%
－ ー	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%

タイプの方が10%も多くなっている。(表4)

註

- 1) 俵里英子(他)「新しい質問紙法エゴグラムと CMI, YG テストとの関係についての考察」
交流分析研究 9-1 p. 14, 18 1984
- 2) 新里里春(他)「交流分析とエゴグラム」 p. 133~136 チーム医療 1986
- 3) 杉田峰康(他)「エゴグラムと四つの基本的構え」 交流分析研究 5-2 p. 38~39 1980
- 4) 杉田峰康(他)「エゴグラムと四つの基本的構え」 交流分析研究 5-2 p. 44 1980

4. ま と め

筆者の保健体育理論を受講した本学の学生という限られた範囲で Ego Gram に基づいて対象学生のパーソナリティ特性や対人態度を検討してきたが、まとめると次のようになる。

1. 学科別に概観すると機械、化工、建築の3学科の受講生は、自我構造的には現実的客観的に思考し、合理的な判断に基づいて適切な行動を選択しようとする Adult な自我状態に主導権を置くタイプが多い。

機能的には、Parent の側面では批判的統制的に自他を厳しく律する CP の自我機能の働きは弱く、保護的寛容的に思いやり優しく許す NP の自我機能が高い者が多く、Child の側面では自由で自発的創造的であるが、気ままで衝動的でもある FC の自我機能の方が出やすく、従順で素直でおとなしいが依存的で抑圧的でもある AC の自我機能が出にくい傾向が伺われる。

Life Position からみると、自信と信頼による共存共栄の建設的な立場から自他肯定的な態度で対人接触を図っていくタイプが多いため、コミュニケーションは開放的で意志疎通が図りやすいものと思われる。

2. 化工の受講生は、構造的には Child 主導型のタイプが多いため、自己内部からの衝動や欲求などを Adult でうまく処理したり、コントロールすることの苦手な者が多い。

機能的には、AC の自我機能が優位に働くタイプが多いため、素直で人あたりはよ

いが自主性に欠け、依存的で抑鬱的な者が多いようである。臨床的にも精神的に神経質傾向が強くやや不安定な者も存在すると思われる。また、CP を Bottom とする者が多いため、けじめのなさ、曖昧さ、自他規制の弱さなども特に目立つかと思われる。

Life Position は、自分に自信がなく、自己卑下の気持ちから対人的に不安不満などを内に秘め、消極的回避的な態度をとりやすい自己否定他者肯定のタイプが多いため、コミュニケーションは自己防衛的閉鎖的になりやすい傾向があると思われる。

3. 化工の受講生は、FC が Peak の者が多いので、他学科に比べ自己中心的で自己主張の強い気ままなタイプが多いように思われる。また、Life Position では自他肯定的な構えから円滑で開放的なコミュニケーションがとれるタイプの比率が他学科より多いようである。

4. 建築の受講生は、NP が Peak の者と CP が Bottom の者が多いため、他学科に比べ自ら援助の手を差し延べるなど世話好きな側面が目立ち、反対に規律的批判的に自他を統制するのが不得手でルーズさ曖昧さなどが表出しやすいものと思われる。

5. 年度別に概観してみると自我構造的には86年度以降においてAタイプの者が減少し、Cタイプの者が増加している。つまり、86年度以降、自己内部からの欲求や衝動を現実には則した形で合理的に処理したり、コントロールしたり、計画的に物事を遂行することが苦手なタイプが多くなっているように見受けられる。

機能的にみると、特に87年度以降の近年の受講生において自他の統制力、批判力、目標指向性、責任感、使命感といったCPの自我機能の特徴的な側面と論理的客観的思考、現実的合理的判断、将来を見通した計画的行動などAからの特徴的機能がやや減少し、FCの自我機能である天真爛漫で物事にとらわれない気ままで気軽な側面や意欲的、創造的、自発的なところがやや増加する傾向が伺える。

Life Position でみると、86年度を除くと全体的に自他肯定の建設的で開放的な対人態度をとる者が圧倒的であるが、86年度の工化受講生と機械受講生において回避的、閉鎖的、自己防衛的傾向の対人態度を示す受講生が多くなっている。

6. 再履修受講生を正規の受講生と比較してみると、構造的には正規受講生に比してCの主導型比率が著しく高いため、自己内部からの欲求や衝動に左右されやすく、計画的に見通しを立て、現実には則した適切な行動のコントロールが不得手なタイプが多いと言えよう。

機能的にみると、CPの自我機能の低さが目立ち、そのためにNP優位の比率が著しく高くなっている。つまり、自他を律することに甘く、理想を持って自他をあるレ

ベルへ引き上げようとする目標意識が希薄でけじめがなく、状況に流されやすいタイプの者が多い。またAの自我機能も目立って低いために、誘われたり頼まれたりすると拒めない人のいい NP や享樂的衝動的な FC に圧倒されて現状認識が甘くなり、合理的な状況判断や適切な行動選択ができにくいタイプが多いと思われる。

以上受講生の作成した Ego Gram から学科別、年度別、再履修受講生と正規受講生に分けてそのパーソナリティ特性や対人態度を総体的に考察したが、筆者の講義受講生という限られた対象範囲であるため、学科が4学科に限定され、また年度によって受講学科が不揃いとなり、十分な分析と考察ができたとは思えない。今後は調査対象を全学科学的に広めるとともに、今少しきめの細かい分析を試みたい。

尚、本論文作成にあたり調査データの処理及びグラフ作成のプログラミングに多大な御協力いただいた本学機械工学科松田弘助教授 ならびに、化学工学科中川克己講師に慎んで謝意を表します。

参考文献

1. E. Berne (杉田訳) 「交流分析と心身症」 医歯薬出版 1973
2. John. M. Dusey (新里訳) 「エゴグラム」 創元社 1980
3. 日本TAセンター編 「交流分析基礎コーステキスト」 早稲田教育出版 1983
4. 横山好治(他) 「生徒のこころ教師の心」 チーム医療 1986
5. 新里里春(他) 「交流分析とエゴグラム」 チーム医療 1986
6. 十河真人(他) 「エゴグラムの成り立ちと発展」 交流分析研究 12-2 23~36 1987
7. 稲葉佳江(他) 「看護学生のエゴグラムによる自己認知の変化と不安性格特性との関係」 交流分析研究 12-2 17~21 1984
8. 俵里英子(他) 「新しい質問紙法エゴグラムとCMI, YGテストとの関係についての考察」 交流分析研究 9-1 13~19 1984
9. 杉田峰康(他) 「エゴグラムと四つの基本的構え」 交流分析研究 5-2 35~48 1980
10. 水野正憲(他) 「TAOKの信頼性、妥当性の研究」 交流分析研究 7-1 28~46 1982
11. 水野正憲 「交流分析研究の基本的構えと体格、適応、性格要因との関係」 第23回日本教育心理学会発表論文集 1981
12. 水野正憲 「交流分析研究の基本的構えの型と不安の関係」 第24回日本教育心理学会発表論文集 1982

(まつなみ しんすけ 本学助教授 保健体育)